

植民地農村日常の記録と日韓交流の記憶¹

—— 1936年蔚山「^{달리}達里調査」を中心に——

許 英 蘭

- I. はじめに
- II. 1936年「達里調査」の目的と調査実態
- III. 「達里調査」に現れた1930年代の蔚山
- IV. おわりに

I. はじめに

2011年11月、韓国蔚山広域市にある蔚山博物館で「75年ぶりの帰郷、1936年蔚山達里」というタイトルを掲げた特別展が開催された。この展示会では、日本の植民地支配下にあった1936年、当時の蔚山達里村の人々の生活像を収めた写真と動画、達里とその周辺の村で使用されていた農機具などの生活用品が展示された。なぜ「帰郷」というタイトルが付けられたのか。それはこの特別展の展示品が全て達里村で記録・収集されたもので、75年ぶりに日本から移管されてきたものだったからである。

1936年7月から8月にわたる約50日間、日本から渡ってきた大学生や民俗学者たちは、達里村に滞在しながら村人の経済状態や衛生、民俗を調査した。この時期に記録・収集された資料は、以後日本のいくつかの機関に保管されたが、達里という村とそこで行われた調査活動は忘れ去られていた。その後、2000年代に入って達里調査当時に収集された資料の存在が研究者によって知られ始めた。そして2011年の蔚山博物館の開館に際し、蔚山地域の住民に1936年当時の蔚山の様子を収めた資料を初めて紹介することができた。

日本による植民地支配下の1910年から1945年にかけて、朝鮮半島は日本にとって統治の対象であり、調査研究の対象でもあった。政治・軍事的な力の劣勢によって主権を失った韓国は、日本の立場からすれば窮乏した未開な日本帝国の一員であり、統治と啓蒙の対象であった。このような状況下で行われた日韓間の交流は、政治・軍事的な領域だけでな

1 本論文は、筆者が書いた「'달리 조사' 와 1930년대 울산 ['達里調査' と1930年代蔚山]」（『울산과 達里 - 사진으로 담은 울산의 모습 [蔚山と達里——写真に残した蔚山の姿]』、울산박물관、2014）を日本読者の便宜のために加筆修正したものである。

く、科学や学術的領域においても対等なものにはなり得なかった。

朝鮮総督府は、効率的な統治のために植民地朝鮮を対象にしたさまざまな調査研究を行い、その結果を綴った報告書を発行した²。明確な統治目的の下で国家が実施したそれまでの調査とは対照的に、1936年の「達里調査」は純粋な民間領域で行われた。しかし、1930年代後半より、日本は長くかつ破壊的な戦争への道をたどることになり、達里調査はその後整理も解釈もされることなく、長い間ほこりをかぶったまま眠っていた。

慶尚南道蔚山村太和江の南側にある平凡な農村で行われた1936年の調査は、極めて異例なものであった³。経済および衛生状態に関する医学部学生らの調査結果を整理した報告書は、1940年に東京の岩波書店から正式に出版された⁴。しかし、調査の舞台となった蔚山邑達里村は、近年まで大した注目を集めて来なかった。「朝鮮の農村」という巨大な名目の下で、「達里」という具体的な場所は埋もれていたのである。

「達里調査」の詳しい経緯は、2000年代に至って本格的に知られるようになった。この調査活動を紹介する上で一番重要な役割を果たした人物は、韓国の人類学者の李文雄教授である。彼は1988年、国立民族学博物館（以下「民博」）を訪ねた際、そこに1936年達里調査時に蔚山地域で集められた農機具など多数の生活資料が所蔵されていることを知った。民博所蔵資料の基本情報と所蔵経緯等をほぼ把握した彼は、ソウル大学を退職した2006年以後、達里調査の実態を本格的に調査・研究し始めた。その成果は、韓国国立民俗博物館が刊行した『郷愁、1936年の蔚山達里（生活用品図録）』（2008）に収録された解題「1930年代植民地朝鮮農村の〈タイムカプセル〉」、および彼が編集に携わった『植民地朝鮮の農村社会と農業経済』（姜鋌澤、YBM Si-sa、2008）に掲載された「姜鋌澤先生の生涯と学問の世界」という文章に詳しく紹介されている。しかし、これらの研究成果によって達里調査の経緯が比較的詳しく紹介されたのに比べ、その調査の全貌と総体的な意味についての研究はいまだ不十分な状況にある。

達里調査の主体は、医学部大学生と民俗学者の二者であった。これは達里の調査目的と意味、そしてその成果を、一旦医学史や民俗学の側面から把握すべきことを意味している。ここで1936年という調査時点を勘案するならば、植民地期の朝鮮農村の実像や朝鮮総督府の統治政策に対する歴史学的理解も必要となる。社会衛生学や民俗学のような近代学問が朝鮮農村に関する知識と情報をどのように見つめていたのかを理解するためには、知識社会的アプローチも必要である。当時の調査活動が持つこのような多面的性格によ

2 허영란 [許英蘭]、「식민지 구관조사의 목적과 실태 [植民地旧観調査の目的と実態]」『사학연구 [史学研究]』86、2007年、参照。

3 達里は現在、蔚山広域市南区達洞に変わった。1930年代に蔚山は韓半島東南側にある平凡な農村だったが、今や韓国の工業化を主導した産業都市として大都市に変貌し、1997年には広域市に昇格し、韓国では釜山、大邱、仁川、光州、大田、蔚山の6ヶ所の広域市がある。

4 朝鮮農村社会衛生調査会『朝鮮の農村衛生』岩波書店、1940年。

り、逆説的に、達里調査は誰も関心を示さない関心の死角地帯に置かれていた。支配と抵抗、収奪と苦難という植民地に関する二分法的思考から抜け出さない限り、政治的視界の外にある純粋な民間レベルで実施された村の調査が持つ意味を解釈し難いことも、その理由の一つであろう。

本稿では、まず当時の調査を企画し実行した主体の観点から、達里調査を再構成する。達里調査の多面的意味を明らかにするためには、現在の解釈を試みる前に、歴史的時間をさかのぼり、当時の時代的脈絡を探ることが必要だからである。調査対象であった達里村は、外部世界と断絶した孤立的な小宇宙ではなかったこともまた記憶しておく必要がある。朝鮮総督府が農村を安定化させるために推進した農村振興運動が盛んだった1930年代半ばという時間的条件や、行政的に蔚山邑に属していたいくつかの自然村落という空間的条件を考慮し、蔚山邑達里を当時の歴史的条件下の中で把握してみたい。達里調査を可能にした民間の関心と参与、それにもかかわらず帝国と植民地、近代と伝統の対立というカテゴリーから抜け出せなかった調査活動の意味を把握することは、今後模索し続けなければならない新しい韓日交流を構想するためにも参考になるだろう。

II. 1936年「達里調査」の目的と調査実態

1. 調査対象地の選定経緯

農民の経済状態や衛生状態を調査するために達里を訪れたグループは、東京帝国大学（以下、東京帝大）医学部に通っていた崔應錫チュウウンソクや洪沢喜守雄キシウオなど医学部の学生11名と経済学部の学生1名の計12名で構成され、また彼らとは別に、東京の私設民俗博物館であるアチックミュージアム所属の研究者たちも続々とこの調査チームに合流した。宮本馨太郎、小川徹、村上清文など3名の民俗学者は達里村の住居様式、農機具、生活道具などを調査する一方、達里村の生活の様子を写真や映像に収めた。

彼らが蔚山邑達里を調査対象に決めたのは、医学部学生の崔應錫と東京帝国大学の農学部で勤務していた姜鋌澤カンジョンテク、そしてこの二人の朝鮮人留学生を支援してきた洪沢敬三とのつながりからであった。

洪沢が『朝鮮の農村衛生』に直接書いた跋文によれば、姜鋌澤が「朝鮮の農村社会経済調査」計画を推進していた時期に、崔應錫が洪沢を訪ねてきた。崔應錫と姜鋌澤は故郷は違っていたが、東京第一高等学校の先輩・後輩関係にあり、二人とも洪沢敬三の財政的支援を受けていた。洪沢が姜鋌澤の農村調査について話をすると、崔應錫が関心を示し、姜鋌澤の調査研究に社会医学的見地の生物学的調査を並行させることを建議したという⁵。

5 이문웅 [李文雄] 『1930년대 식민지 조선 농촌의 '타임캡슐' [1930年代植民地朝鮮農村の'タイムカプセル』』、『향수, 1936년 울산 달리 [郷愁, 1936年の蔚山達里]』(生活用品図録) 国立民俗博

蔚山達里出身であった姜鋌澤(1907～?)は蔚山公立普通学校と大邱^{テフ}高等普通学校を卒業した後、日本に渡り、東京第一高等学校を経て東京帝大農学部に進学した。1933年3月に東京帝大を卒業した後は、研究員の資格で東京帝大農学部^{テフ}に所属し、朝鮮の農村経済を研究した。農学部的那須皓教授の指導の下で、朝鮮農村に対する詳細な社会経済調査計画を樹立した後、服部報公会の財政的支援を得て日本と朝鮮を往来しながら、蔚山などに滞在して調査研究を遂行した⁶。

姜鋌澤の「農村社会経済調査」は、彼の個人的研究プロジェクトというよりも、東京帝大農学部の指導教官であった那須博士の研究テーマに包含されるものであった。那須博士が研究責任者であり、姜鋌澤は朝鮮の現地調査を担当したと思われる。研究費を支援していた「服部報公会」の記録によれば、「朝鮮農村生活の調査と研究」という研究計画は、1935年(研究費は2,000円)、1937年(同2,000円)、1938年(同800円)にわたって実施された3年間のプロジェクトであり、東京帝大の那須教授と付随(研究員)の姜鋌澤が遂行した。1年目の1935年には那須教授と姜鋌澤の二人の名義で支援されたが、あとの2年間は那須教授に研究費が支援された⁷。

崔應錫らの調査対象の候補地として、姜鋌澤が現地調査を進めていた地域2ヶ所が有望視された。朝鮮半島北部の平安北道定州郡^{チョンジュ トグオン シミヤン}徳彦面沈香洞と、南部の蔚山邑達里である。この2ヶ所のうち、姜鋌澤の故郷であった蔚山邑達里が最終的に調査対象地として選定された。姜鋌澤の故郷でもあり、当時彼が達里に滞在して研究を進めていたことが重要視されたものと思われる。とりわけ、日本人が多数参加していた調査団が住民と直接接触し、いちいち対面調査をしなければならないという作業の特性上、現地の事情に詳しく、住民から好意的な協力を引き出せるかどうか重要な考慮事項だったからである。結局、こうした調査の便宜性や効率性などが考慮され、蔚山邑達里が調査対象地に選定されたのである。

2. 調査の目的

(1) 社会衛生的調査

達里調査報告書に該当する『朝鮮の農村衛生』には、日本労働医学の創設者として知ら

物館、2008年、267-268頁。

6 姜鋌澤の年譜や研究活動に関しては、이문웅 [李文雄] 「강정택 선생의 생애와 학문세계 [姜鋌澤先生の生涯と学問世界]」(『식민지 조선의 농촌사회와 농업경제 [植民地朝鮮の農村社会と農業経済]』YBM Si-sa、2008年)を参照。

7 服部報公会『服部報公会60年小史』別冊資料、1990年、16頁、37頁、50頁(前掲「1930년대 식민지 조선 농촌의 '타임캡슐」』『향수, 1936년 울산 달리 [郷愁, 1936年の蔚山達里]』267頁から再引用)。服部報公会の支援もやはり東京第一高等学校の留学時代から姜鋌澤を財政的に支援してきた渋沢敬三の影響力があったという。

れている暉峻義等⁸が書いた序文が収録されている。彼は、「社会衛生学は生活の学問であり、街の学問である」という文章から説き起している。その理由は、達里調査が社会衛生的観点から進められたものだったからである。1ヶ月という短い調査期間、また科学的専門性が不完全な学生達によってなされた調査であるという点を取り上げ、資料の正確さに対して疑問を持ちながらも、「朝鮮農村民の生活状態」が把握できる資料である点に、彼はこの報告書の意義を見出している⁹。

そうであるとするならば、農村民の生活状態を把握しようとする「社会衛生学」とはどのような学問なのか。日本の国語辞典によれば、社会衛生学は「国民の健康状態を改善し、向上させる方法を研究する衛生学の一つの分野」と定義されている¹⁰。類似表現として「社会医学」という用語もあり、これは「生物としての人間だけではなく、社会的存在としての人間を重視し、研究または診療を行う医学であり、常に集団を対象にし、各種社会階級や階層についてそれぞれの特殊な生活状態や健康状態の関連性を検討し、特に勤労者階層の健康維持、増進、回復を医学的・社会的に図る医学分野」と定義されている¹¹。つまり、社会医学とは、国民の健康増進と労働能率の向上のために、個人ではなく、階級や階層別に生活状態と健康状態を連関させて把握することを目的とする学問分野のことである。

韓国では「社会医学」という用語がまれに使われることがあるが、その際には「人間の健康と疾病を社会全体の機能と連関させて」把握することを意味している¹²。この観点からすれば、社会または経済的環境や構造によって発生する健康問題は、特定疾患の治療技術や特殊な医療科学だけでは解決できない構造的な環境問題である。それゆえ、「科学的に見た時、疾病は個人の過誤から被るものではなく、社会環境—物理・化学的環境から、社会、文化、政治、経済のあらゆる分野を包含する—と密接な関係を有しており、それに対する対策も社会のあらゆる分野の力に拠ってのみ達成できる」のである¹³。従って、疾

8 暉峻義等(1889-1966)は労働生理学者、産業医学者であり、日本の「労働医学」を創設した人物である。警視庁の依頼を受け、東京市内の貧民層の衛生状態を調査し、1919年に創立された大原社会問題研究所に参加した。1920年紡織労働者の健康と生産能率を研究するため設立された倉敷労働科学研究所の所長に就任するなど、日本労働実験医学部門で先駆的な業績を残した(デジタル辞書統合サイト <http://kotobank.jp> より)。

9 조선농촌사회위생조사회 [朝鮮農村社会衛生調査会] (임경택 [林慶澤] 訳) 『조선의 농촌위생 [朝鮮の農村衛生]』 国立民俗博物館, 2008年, 12頁。

10 小学館で刊行したデジタル大辞泉(デジタル辞書統合サイト <http://kotobank.jp> より)。

11 百科事典マイペディア(株式会社日立ソリューションズ・ビジネス, 2010年、デジタル辞書統合サイト <http://kotobank.jp> より)。

12 강신익 「의학의 세 차원 - 자연의학, 사회의학 그리고 인문의학」, 『의철학연구 [医哲学研究]』 6, 2008年, 71頁。

13 조규상 「교회와 사회의학 [教会と社会医学]」 『한국카톨릭병원협회지 [韓國カトリック病院協

病を予防し、社会的レベルで健康と衛生を維持するために何よりも必要なものは、環境、すなわち生活状態を把握する作業である。

1936年、東京帝大医学部の学生たちが達里という一定規模の農村を調査対象に選定した後、農民の経済状態と衛生状態を連結させて把握しようとしたのは、まさに以上のような認識があったからであろう。医学部の学生で構成された調査団は、社会衛生的問題意識を土台として朝鮮農村の衛生状態を把握しようと考え、朝鮮農村を代表する事例として達里村を選定した。彼らの調査は、直接的な健康や衛生部門を超えて、村の農民達の階層別経済状態までを調査対象に包含させた。衛生状態は「経済生活の内容および形式と根本的な関連性を持っている」という認識を持っていたからである。このような社会衛生的関心は、個人ではなく、集団に対する観察を重視することになる。彼らは達里村のような「一つの農村について社会衛生的な調査を行う場合には、経済に関連して、生活様式としての衣食住、労働の質と量、体位や疾病の状態、そして人口論的考察等の問題、さらにこの要素間の密接な関連性等を追求」すべきだと信じていた¹⁴。調査団に経済学部の学生が一人含まれていた理由もここにあるだろう。

社会衛生的目的のもとに推進された達里調査の直接的な目標は、次の二点を確認することであった。第一に、朝鮮の一農村である達里の衛生状態が、一方で都市の各労働部門と比べて、他方で日本国内およびその他の各国の農村と比べて、どのような様相を見せているのか。第二に、経済状態を基準にして分類された達里の各農民層が見せる社会衛生的様相が、階層別にどのように異なり、また類似しているかということである。換言すれば、達里村の衛生状態を農業労働と連関させて把握する際、対外的には朝鮮国内の他の都市および他国の農村と比較し、対内的には達里村を階層別に分類して比較しようとするものであった¹⁵。そのため、まず達里村の経済状態を総括的に把握し、農民層を階層別に分類する経済調査を実施した。達里の各農民層が有していたそれぞれの経済的条件が各階層の社会衛生状態にどのように反映されているかを研究するためには、経済条件の優劣を基準にして農民階層を分類する作業が先行されなければならなかったためである¹⁶。

このように、達里調査は朝鮮の農村の生活実態について経済的・衛生的側面を有機的に連結させて把握するための作業であった。

（2）達里の民俗調査と渋沢敬三

崔應錫ら調査チームの社会衛生的調査が進行する中、民俗学者が合流し、達里村の生活用具や民俗品、村落民俗に関する調査が並行した。彼らはすべて渋沢敬三が設立したア

会誌』3-2、1972年、5頁。

14 前掲、조선농촌사회위생조사회 [朝鮮農村社会衛生調査会]、14頁。

15 同、15頁。

16 同、26頁。

チックミュージアムの研究員であった。服飾を専攻する宮本馨太郎は医学部調査団一行とともに7月10日に達里入りした。彼は自身の関心分野である朝鮮の服制について調査をする一方で、達里村や蔚山邑内市（五日市）を写真や映像に収めた。経済地理が専門の小川徹は7月26日に、同じくアチックミュージアムの研究員であった村上清文は8月4日に達里に到着した¹⁷。

民俗学者の調査は、医学部学生の衛生調査に必要な資金2,500ウォンを全額支援した渋沢敬三（1896-1963）の後援により成り立った。1896年東京生まれの敬三は、明治期に日本財界の指導者であった渋沢栄一の孫であり、日本民族学の発展過程においては「常民文化研究の組織者」¹⁸と呼ばれる人物である。彼は東京帝大経済学部に進学し、実業家への道を歩みながらも、動物学などへの造詣も深かった。彼が東京帝大を卒業した年に設立されたアチックミュージアムは、「アチック (attic)」、すなわち屋根裏部屋を冠していることからわかるように、動物の標本や玩具などを集めて作られた小さな博物館からスタートした。敬三は横浜正金銀行ロンドン支店での勤務を終えて帰国した1925年から、アチックミュージアムを中心とした同人会を活性化させつつ、民俗学に対する関心を本格化させた¹⁹。

アチックミュージアムは敬三が作った民間研究所であったが、豊富な財力をもとに専任研究員まで雇い、民俗に関する研究を本格的に推進した。敬三が支援し組織した民俗学は、日本民俗学を定立したと評される柳田國男の方法とは異なっていた。アチックミュージアムの研究活動は、柳田國男の民俗学を意識しつつ、柳田が軽視した事象を採択し、方法的にも拡充したものであった²⁰。柳田は物質的類型の民俗ではなく、主に行事や儀礼などのような民俗の破片を可能な限り多く全国的に採集して系統的に蓄積し、下からの一体化した民俗を構成する一国民俗学を志向した²¹。それに比べて、民俗学者であると同時に民俗学研究の組織者であった敬三は、柳田民俗学とは区分される新たな方向を志向しながら日本民俗学の外延を拡張したと評価されている。敬三は、民俗学にもとづきながらも、異民族に対する人類学的研究分野である民族学の定立と組織化に貢献した²²。

17 神奈川大学の常民文化研究所から提供された調査団の「移動経路及び日程」整理資料、前掲 이문호、国立民俗博物館、2008年、267頁、小川徹「南朝鮮の一農村に於ける村落生活と民具について：1936年慶尚南道蔚山邑達里調査個人報告」（『民族学研究』21、1957年）、前掲『항구, 1936년 울산달리』国立民俗博物館、2008年、282頁。

18 池田彌三郎・宮本常一・和歌三太郎『民俗学のすすめ』（日本の民俗 第11巻）河出書房新社、1976年、60頁。

19 同、61-62頁。

20 福田アジオ『日本の民俗学』、吉川弘文館、2009年、150頁。

21 同、151頁、および남근우『「朝鮮民俗学」と植民主義』、東国大学出版社、2008年、200頁。

22 前掲、福田アジオ、153頁。

敬三の民俗学的関心と志向は、1936年に達里で進められた民俗調査を理解するための重要な背景となる。彼は玩具に対する関心から始まり、多様な物質文化に関心を広げた。当時、日本民俗学界では民具という用語がなく、代わりに土俗品という用語が使われていた。しかし、敬三が1935年頃、土俗品の代わりに、民間の生活用品を示す「民具」という用語を導入した。敬三と彼が後援した民俗学者は、民具を中心として常民の有形文化、物質文化を調査・収集し、研究した。1930年代に入ると、各地の民具を収集、その製作方法、利用方法に関する情報を記録し、研究した。したがって、日本で民具に関する研究は、敬三のアチックミュージアムを中心に発展したといえよう²³。

アチックミュージアムは研究成果を共有するために、1935年7月に『アチックマンスリー』が創刊された。この『アチックマンスリー』には、達里調査に参加した学生調査員とアチックミュージアム研究員が達里で進めた民俗調査の経過と経験が掲載されている²⁴。

以上のように、達里村に関する民俗調査は、民具を媒介とした比較研究の一環であり、渋沢敬三やアチックミュージアムの志向が具体的に反映している。民俗学者は達里の民俗を調査しながら、達里村はもちろん、蔚山地域で使用されていたさまざまな民具、すなわち農機具および生活用具を収集していった。これらは、アチックミュージアムがさまざまな地域で収集したその他の民具とともに民具コレクションとしてまとめられ、現在民博に所蔵されている。

アチックミュージアムは、戦時期の1942年に敵性語であった英語名を改称して、「日本常民文化研究所」となり、「常民」という名称を前面に掲げた²⁵。「常民とは、衆庶等の語感を避け、貴族、武家、僧侶階層等を除いたコモンピープルという意味で使用」した用語である。敬三は、常民という用語を明白に階層性を伴った概念と規定し、農山漁村だけでなく、市街地を含んだ地域社会の住民として、また農商工にまたがる階層として、把握した。常民に対する彼のこのような思考方式は、1920年後半に固定化したものであった²⁶。こうした点を勘案すると、アチックミュージアムが実施した達里に対する民俗調査は、民具などの物質文化を媒介にして、特定地域を総体的に調査する作業であると同時に、比較研究のための資料収集でもあり、朝鮮農村の常民文化に対する総合的研究の一環であったといえよう。

敬三は1935年頃から民俗学の資料を映画として記録し始めた²⁷。達里調査の過程におい

23 同、151頁。

24 アチックミュージアム『アチックマンスリー』第14号（1936年8月30日）、第15号（1936年9月15日）、第16号（1936年10月1日）。

25 福田アジオ、前掲、153-154頁。

26 宮田登、『日本の民俗学』（講談社学術文庫）講談社、1985年、58頁。

27 池田彌三郎・宮本常一・和歌三太郎、前掲、65頁。

でも映像を残している。彼は研究の組織者としてさまざまな学会を支援し、多くの学者達の研究を後援し、また多数の人々が参加する共同研究を奨励した。さらに、現地調査の重要性を強調し、彼自身が直接数十回にわたって調査地を訪問している²⁸。達里調査が終了する時にあわせて、敬三は朝鮮旅行を計画し、実行に移した。1936年8月中旬、農村衛生調査が進められていた蔚山達里の訪問に続いて、西南海岸の^{モクポ}木浦にも行き、船舶に乗って多島海を遊覧した。

3. 調査団の構成と調査日程

敬三は『朝鮮の農村衛生』の跋文で、衛生調査団一行が達里へ出発したのが7月11日であると記している²⁹。しかし、当時報道された新聞記事や関連資料を総合して神奈川大学常民文化研究所が作成した日程表等を見ると、調査団一行が達里に到着したのは7月10日だと思われる。1936年7月8日付『釜山日報』は、「東大医学部学生である崔應錫他10名が、来る10日から約1ヶ月間蔚山郡蔚山邑達洞（達里）付近を中心にして、興味深い衛生調査を実施することになった」と報道している³⁰。彼らは7月12日から本格的な調査に着手したものと思われる。

衛生調査を実施した学生調査団は、計12名で構成された。東京帝国大学医学部の学生8名（崔應錫、渋沢喜守雄、島村喜久治、北錬平、大串茂、池田忠義、尾崎嘉篤、江副勉）、同経済学部の学生1名（李快洙）、東京女子歯科医専の学生1名（洪鍾任）、東京女子医専の学生2名（呉善一、李小姐）で、朝鮮人学生が5名（男子2名、女子3名）、日本人男子学生が7名という陣容であった。

渋沢は、「男女の朝鮮および日本人学生等が互いに連携して作業」したことに、また「この調査の結果、朝鮮「人」と日本「人」が直接的に端的に接しながら関係を結べることができた」ことに、特別な意味を与えた。個人研究よりもチームを組んで進める共同研究を重視した敬三は、朝鮮人と日本人学生の共同調査に対して学問的価値以上の意味があると見ていたのである³¹。

朝鮮農村に対する社会衛生調査を計画し、敬三からの支援を引き出した崔應錫は、同じ医専学生の渋沢喜守雄とともに7月1日に先発隊として日本を発った。残りの10名は7月10日に達里に到着した。達里から近い^{シンジョン}新亭里にある姜鋌澤の本家を宿泊所と決め、調査対象である達里村の中にある洞舎（現在の達洞^{キョンノダン}敬老党の場所）を調査本部とした。姜鋌澤の本家とは、新亭里にあった母方の叔父であるイ・ジョンハの家を指している。新亭里と達里は隣接しており、大した不自由もなく徒歩で移動することができた。調査団は真

28 前掲、60-61頁。

29 前掲、조선농촌사회위생조사회 [朝鮮農村社会衛生調査会]、338頁。

30 「興味深い衛生調査、東大医学部学生団来朝」『釜山日報』1936年7月8日。

31 前掲、조선농촌사회위생조사회 [朝鮮農村社会衛生調査会]、340頁。

夏の間中、現在の蔚山南部警察署付近にある宿泊所から達洞^{カンナム}江南初等学校近くの達里村まで往復して調査を進めた³²。

前述したように、敬三は達里調査の日程にあわせて、朝鮮旅行を計画した。達里調査が完了した時分の8月中旬、達里に寄り、釜山を経て木浦へ移動した後、多島海を回って見る旅であった。この計画は実行に移された。アチックミュージアムの後身である神奈川大学常民文化研究所と、調査に参加した宮本馨太郎が収集した資料や写真等を保有している宮本記念財団には、達里調査当時の記録以外にも、渋沢一行の多島海踏査当時の写真や映像記録が残っている。達里村に対する衛生調査および民俗調査に参加した人々、敬三一行の朝鮮旅行を日程別に整理すると、次のとおりである³³。

7. 01.	崔應錫と渋沢 ^{きしゅお} 喜守雄、日本出発
7. 10.	医学生調査団一行及びアチックミュージアムの宮本馨太郎、蔚山達里に到着
7. 12.	本格的な調査の開始
7. 26.	アチックミュージアムの小川徹、蔚山達里に到着
8. 04.	アチックミュージアムの村上清文、蔚山達里に到着
8. 13.	渋沢敬三、高橋文太郎（アチックミュージアムの同人）、櫻田勝徳などが東京を出発、釜山到着
8. 14.	渋沢敬三一行、蔚山達里に到着
8. 16.	渋沢敬三一行、蔚山達里を出発、釜山へ移動。達里で民俗調査を実施したアチックミュージアムの研究員3名全員が達里を離れ、敬三と同行
8. 17.	敬三一行、釜山から木浦へ移動
8. 17 ~	京城帝国大学の秋葉隆、朝鮮総督府警部補の佐藤などが釜山から合流し、木浦へ移動。船で楸子島などの多島海一帯をめぐり、その過程を写真や映像で記録
8. 19.	木浦から釜山へ移動
8. 18.	達里調査に参加した学生たちが蔚山から引き上げ
8. 20.	敬三一行、釜山を発ち、下関へ移動

7月12日から始まった学生調査団の衛生調査は、8月中旬まで1ヶ月強の期間で進められた。敬三の達里訪問時点では、調査作業は概ね終了した状態であった。敬三一行は8月14日の夕方に到着し、二日間新亭里のイ・ジョンハの自宅に滞在した。姜鋌澤との縁

32 同、274頁。

33 神奈川大学常民文化研究所から提供された調査団の「移動経路および日程」、アチックミュージアム『アチックマンズリー』第13号（1936. 7. 30.）、第14号（1936. 8. 30.）、前掲、朝鮮農村社会衛生調査会、339頁。

で1934年12月に達里を訪問したことがある敬三は、2回目の蔚山訪問であった。夜に村人と調査員が洞舎に集まり、マッコリを飲んで太鼓や鉦をたたいて踊りながら「互いに融合し、心を通わす姿」は、彼の心の琴線にふれた。敬三は「朝鮮と日本の区別もなく、何のわだかまりもなく、互いが互いを忘れていた世界」を経験し、感動したと書いた。こうして達里訪問を終えた渋沢一行は、8月16日の午後に蔚山を発ち、釜山に向かった³⁴。

調査団の訪問を好ましく思わず、調査や診療に応じなかったり、生存のための労働に苦しみ、診療に応じる余力さえなかったりした下層農民も少なくなかった³⁵。しかし、調査記録にそのような不協和音や異見が反映する余地はほとんどなかった。調査団が調査できた内容だけが「達里調査」の記録に残されているという点で、達里調査のその他の部分は想像するしかない。しかし、達里調査の記録が語っていること、そして語っていないことも含めて考察に及ばなければ、当時の農村を理解することはできないだろう。

達里村は、植民地朝鮮の中で農民が生きていた具体的な生の場であり、医学生の実生活調査には、疲弊した植民地農村の生が反映していた。しかし、現実の苦痛とは別に、敬三たちにとって、達里村は研究対象として「純粹」な民俗の世界であった。同時に、彼らにとって朝鮮の農村は、文明の介護が必要な未開の世界であった。敬三は達里を発つ時、「朝鮮の農民は、愛に飢えた孤児にも似たものを心に抱いているのではないか、という寂しい気分になった」と書いている³⁶。彼らにとって達里村は、近代文明から疎外され遅れていながらも、人情があふれる平和な農村であった。それは帝国主義の日本が植民地朝鮮の農村を描いた最も典型的な姿でもあった。

アチックミュージアムの所属研究員は、それぞれ1ヶ月、半月、10日間程度、達里村の民俗を調査し、民具を収集したが、彼ら3人はすべて8月16日に敬三とともに達里を離れた。残る学生調査団も18日に達里を出発し、日本に帰った³⁷。

4. 調査方法

衛生調査団の調査対象は合計127戸であった。調査団は各農家の経済状態および衛生状

34 前掲、조선농촌사회위생조사회 [朝鮮農村社会衛生調査会]、339頁。

35 調査団は診療所を設置し、約2週間に亘り、508名の住民を診療した。しかし、朝から晩まで働かざるを得ない最下層農民世帯、17～8歳の処女たちや新婚夫人、治療効果に期待のない老人、そして調査に不満を持った人など6分の1あまりの住民は診療に応じなかった（同、290頁）。

36 祭魚洞「五回目の朝鮮」『アチックマンスリー』第15号、1936年9月15日（祭魚洞は渋沢敬三の筆名）。

37 衛生調査を主導した崔應錫は、1937年に朝鮮に帰国したと見られる。1937年3月3日付『毎日申報』に掲載された留学を終えて帰国する学生の名簿には崔應錫の名前も含まれていた（「螢雪の功を成し遂げ、玄海灘を渡る智識群五百廿九名。実際の修学が次第に増加傾向、春が伝へる明朗譜」『毎日申報』1937年3月3日）。

態を把握するために、詳細な調査表を作成した。しかし、衛生調査に関するいかなる事前知識や認識もない状態で調査表を各農家に配布し、各自作成してくるよう要請することには無理があった。そこで、農民たちに一人ひとり会って質問をし、回答を調査表に記入するやり方で対面調査を行った。調査が行われた7月と8月は、麦打ちや畑仕事等の繁忙期であり、調査員は「早朝および夜食後から就寝前の時間、農民たちが休む少しの間を利用して、各農家を戸別訪問し、元標に記入していく方式」を選ばなければならなかった³⁸。

農民たちが休む間を利用して対面し、調査票を作成することも相当な困難であったが、何よりも日本人が多数含まれている調査団にとって、言語疎通の問題は大きな障害であった。植民地統治下の一般的な朝鮮農民は、大部分が日本語を読んだり話したりすることができなかった。戦時体制期にさしかかると、日本語に対する強制的教育が拡大し、日本語常用者が多少増えてきたが、達里調査が実施された1936年頃に朝鮮農民の中で日本語を解し会話ができる者は大変少なかった³⁹。こうした言語問題など、調査過程で生じた問題を解決するため、達里住民の中で日本語ができる2名が通訳を務め、調査団を助けた。アチックミュージアム所属の小川は、1957年に調査当時を回顧して、「当時言葉が通じなかったわれわれを暖かく迎えてくれた住民たち」に感謝を表している⁴⁰。しかし、達里の住民たちが好意や親切を施してくれたとしても、言語問題による調査の困難は大きかった。

学生調査団の社会衛生的調査内容は、調査結果を整理した報告書（『朝鮮の農村衛生』）を通じてその詳細を把握できる。民俗学者による民俗調査に関しては、調査結果を整理した結果報告書の刊行が計画されたが、結局未刊行に終わったため、その全貌を知ることはできない⁴¹。ただ、調査当時に撮影した写真やメモ等が残っており、調査に直接参加した小川徹が1957年に発表した論文、宮本馨太郎が1967年に発表した論文等を通じて、その一端をうかがい知ることができる⁴²。また、宮本馨太郎が衣服調査等のために作成した調査票等が、宮本記念財団に残っている。それらを通じて、調査項目等を類推できるが、基

38 前掲、2 조선농촌사회위생조사회 [朝鮮農村社会衛生調査会]、9-30頁。

39 ある統計資料を参照した研究によると、日本語が多少解読でき、一般会話が可能な人の割合は、1933年には全体人口の7.8%、1941年には全体人口の16.6%であった（김영희 「일제 지배시기 한국인의 신문접촉 경향 [日帝支配期における韓国人の新聞接触の傾向]」、『한국언론학보 [韓国言論学報]』46-1、2001年、47頁）。これは都市と農村、男女を問わず合算した数値である。したがって、達里のような農村には日本語話者が少ない上に、女性はさらに少数だった。

40 前掲、小川、282頁。

41 アチックミュージアムは達里調査結果を整理し、『蔚山邑達里農村見聞録雑纂』という報告書を刊行する計画だったが、何らかの事情により、実現できなかった。

42 小川徹「南朝鮮の一農村における村落生活と民具について—1936年 慶尙南道蔚山邑達里調査個人報告」『民族学研究』第21巻（4）、1957年、宮本馨太郎「朝鮮農村の生活と民具」『日本の民具』第四巻、慶友社、1967年。

本的には対面調査および情報提供者に依存した聞き取り調査形式が中心であった。小川の調査もやはり情報提供者、すなわち達里住民への対面調査を通じて行われたようである。部分的には小川が参与した観察が含まれているが、それも通訳の助けによるものであったため、結局は通訳者が情報提供者の役割をはたしていた。

加えて、民俗調査で注目されるのは、写真および映像として残されている記録である。撮影は主に宮本馨太郎が担当したと思われる⁴³。達里村の全景や村人の様子、蔚山邑内の中心で開かれた蔚山邑内市場を撮影した写真や映像資料が、宮本記念財団と神奈川大学常民文化研究所に保管されている。アチックミュージアムが持っていた資料の中で、写真と映像等は常民文化研究所が、農機具および生活資料等、いわゆる「民具」は民博が保存している。達里関連の民俗資料の保存状況に関しては、李文雄が詳細に紹介している⁴⁴。

写真はどの記録よりも対象との関係が直接的であるため、以前から人類学または民俗学の注目を集めた。達里を調査したアチックミュージアムの研究員たちも、達里の農民の労働、日常生活、蔚山邑内市場が開かれた様子を映像に収めた。達里訪問に続いて行われた敬三一行の多島海旅行当時に撮影された映像もまた伝わっている。1936年時点の蔚山の様子を映し出している映像資料が残っているのは、蔚山地域史の研究にとって大きな幸運だといえよう。ただし、映像は撮影者による対象の選別が行われたという点において、撮影者がどのような理由で何を記録しようとしたのかに対する批判的な解釈作業が必要であることは言うまでもない。

Ⅲ．「達里調査」に現れた 1930 年代の蔚山

1. 1930 年代の蔚山

蔚山邑達里は 1930 年代の朝鮮におけるありふれた農村であった。農業の不振により農民層の没落が加速化する中で、朝鮮総督府の政策は農村の安定化に焦点が当てられた。宇垣総督が意欲的に推進した農村振興運動は、そのような植民統治の目標を達成するための政策であった。ここでは、1930 年代における朝鮮の一般的状況を念頭に置きつつ、蔚山邑と達里村の様子を素描することにする。

1930 年代、朝鮮工業化政策が本格化し、日本－朝鮮－満州を繋ぐ日本の植民地統治体制の中で、蔚山地方は要所として注目を集めた。植民地化以前から日本人が移住・定着して要衝としての基盤を整えた方魚津バンオジンと長生浦チャンセンポが蔚山に位置していたため、蔚山地方全体が日本帝国主義の大陸侵略政策に占める重要性を強めていた。それを示す代表的な事例

43 達里調査の様子を撮影した蔚山の関連写真の保存状況については、『朝鮮の農村衛生』に掲載された卍현승の文書が詳しく紹介している。

44 前掲、이문웅、国立民俗博物館、2008 年、270-271 頁。

が、蔚山と山口を繋ぐ航路を新設し、国民総動員体制下で戦時国土計画にもとづき、蔚山を工業港、工業都市として開発しようとする事業の推進であった。1930年代後半から推進されたこの計画は、築港を通じて蔚山の鹽浦^{ヨムポ}一带を工業港として開発し、蔚山と山口県^{ヨムボ}の由谷^{ユヤ}を繋ぐ由蔚航路を新設して、大峴^{テヒヨン}面と下廂^{ハサン}面^{ハサン}を重要工業施設が集中する工業地帯として開発する内容が含まれていた。蔚山の自然的・産業的・戦略的立地が有している利点を最大限に考慮した構想であり、日本が戦争を通して目指した「興亜の大業」を達成するために必要な事業として設定された。1943年5月には蔚山港建設のための公式的な起工式が開催されたものの、太平洋戦争の敗戦と朝鮮半島の解放によって頓挫した⁴⁵。

また朝鮮を植民地化した日本は、石炭や木材、鉱物、海産物等、朝鮮半島内の物資を日本へ搬出するために、東海（日本海）沿いに元山^{ウォンサン}から釜山^{プサン}を繋ぐ鉄道の敷設も計画した。その事業の一環として、蔚山を通過する東海南部線が開通した。釜山^{プサン}鎮^{ボハン}駅と浦項^{ポハン}駅を繋ぐ全長147.8kmの鉄道路線であった。慶州^{キョンジュ}～浦項^{ポハン}区間が1918年10月31日に開通し、釜山～慶州区間は1935年12月16日に開通したが、この路線は達里村の外郭を通過した。達里調査団と敬三たちは下関から連絡船で釜山に到着した後、汽車に乗り、蔚山入りしたものである。当時釜山から蔚山へ移動する方法は、鉄道以外にも貸切り自動車を利用することもできた。

宮本記念財団には、達里調査当時に宮本が撮影したと思われる映像が所蔵されている。その映像には、達里村一带の様子と蔚山邑内市場の風景が収められている。映像に見られる蔚山邑内市場は、蔚山邑内の幹線道路で5日毎に開かれる定期市場である。本部市場、邑内市場、蔚山市場などと呼ばれたこの場市^{チャンシ}（市場）は、蔚山郡一带の市場体系における最上の市場であり、毎月5と10が付く日の計6回開設された。しかし、1930年代に入ると、交通問題・衛生問題等を理由に市区改正論議が本格化し、中心街路で開かれていた市場の移転が蔚山地域の課題として浮かび上がった。移転対象地にかかわるさまざまな論難と葛藤のあげく、1937年7月3日にチャントゴルで開かれていた蔚山邑内市場はソナム^{ソンナム}城南洞^{ヨンデ}にある蓮池^{ヨンデ}地区に移転した⁴⁶。したがって、1936年7月から8月の間に撮影された蔚山市場の様子は、蓮池への移転前後の姿を捉えているということになる。

1930年代には働き口を求めて、日本に渡る農民や労働者が増大した。日本政府は朝鮮人労働者の渡航過剰を食い止め、満州支配を安定化させる目的で、日本人農民と朝鮮人農民の満州移民を組織的に推進するようになった。農村の安定性が弱まり、農民層の分解が加速化すると、農民をはき出す要因が強化された。そうした状況は達里村でも例外ではなかった。達里村はどの地域よりも農民の日本渡航が多い所だった。こうした事情は調査団

45 허영란 [許英蘭] 他 『울산항 개항 50 년사 [蔚山港の開港 50 年史]』 蔚山港湾公社、2013 年、62-69 頁。

46 허영란 [許英蘭] 「근현대 울산지역 장시 변동과 지역질서의 재편 [近現代蔚山地域の場市変動と地域秩序の再編]」、『역사와 경제 [歴史と経済]』 81、2011 年、80-96 頁。

の調査記録にも反映している。人口排出のメカニズムと農村安定化法案については、蔚山達里を対象とした姜鋌澤の研究がある⁴⁷。これは日本と満州への移民政策を樹立するための基礎研究の性質を持つものである。

蔚山は地理的に日本ととても近く、開港直後から日本人の移住と勢力拡充が甚だしい地域であった。日本渡航者が比較的多いのが特徴といえるが、達里村自体は当時よく見られた自然村落の姿に近かった。社会衛生的・民俗学的調査対象としての蔚山達里は、典型的な朝鮮の農村に近い属性と特徴を持っていたといえよう。

2. 達里村と村落共同体の変化

(1) 地理的環境と住民構成

蔚山邑内に所在し太和江流域の東南側 2 km に位置する達里村は、平野を抱えており、比較的水田が多い農村であった。1936 年の調査当時、総耕地面積は約 80 町歩であり、水田は約 67 町歩であった。朝鮮時代に太和江河口が東進する以前には、達里一帯の水田地帯は浅い湾であり、海水に浸かっていた。朝鮮時代に入り、水辺に集落を形成していた達里村は、後背低湿地帯の干拓により水田を抱えた村に変貌した。村人の口伝によれば、達里村の発生あるいは発展には製塩業が関連していたと考えられる。しかし、1910 年代にはすでに塩田は消えてなくなった⁴⁸。

達里は同族村ではなかった。達里には 23 種の多種多様な姓氏が混在していたが、同姓世帯を 5 世帯以上保有した姓は、8 種に限られていた。また、金、李、朴、崔、張の 5 姓に属する世帯が全世帯の 3 分の 2 を占めており、村の主流となっていた。その他にもわずか 5 世帯に過ぎないが、達里全氏も有力な家系と考えられる。以上の 6 大姓の大多数が、達里集落の中心地に居住していた。その中には村の「有志」、すなわち有力者が少なくなかった。達里の有志であった朴氏は、蔚山朴氏の宗族に属し、その宗家が蔚山邑内に居住していた⁴⁹。したがって、達里住民が属している親族ネットワークは、空間的に達里の範囲を超えて形成されていた。

達里には同居戸数が多く、戸数と世帯数が一致しなかった。日本人は 2 戸 2 世帯で、そのうち 1 世帯は雑貨商であった。居酒屋 2 軒、漢方医、雑貨店、かご職人、資産生活者がそれぞれ 1 軒、残りはすべて農業世帯であった。農業世帯の構成は、地主 4 戸、自作農 7 戸、自小作農 42 戸、小作農 51 戸、農業労働者 23 戸で、達里農民の階層細分化がかなり

47 강정택 「조선 농촌의 인구배출 메커니즘; 울산 달리의 인구배출에 관한 조사」 [朝鮮農村の人口排出メカニズム：蔚山達里の人口排出に関する調査]、『식민지 조선의 농촌사회와 농업경제 [植民地朝鮮の農村社会と農業経済]』YBM Si-sa, 2008 年、245-270 頁。

48 前掲、小川徹、283-284 頁。

49 同、285 頁。

進んでいたことがわかる。しかし、他の地方に比べ、農民層の没落が特に深刻な状態だったというわけではない。達里村は水利事業等がなされ、農業生産力は比較的高い方であった。零細農や農業労働者の中には達里出身ではなく、働き口を求めて北部地方から流入して来た人もいた⁵⁰。

(2) 達里の社会組織

朝鮮内の他の村と同様に、当時「契」(互助組織)は達里で最も重要な社会組織であった⁵¹。達里でも「契」の慣行が重層的に見出される。喪布契(葬礼費拠出)、老人契、同庚契(同じ年齢)、松山契、増産契(金融)、同郷人の契、日光契(エチレンの購入)、日記契(小川は、彼らを「進歩的な農民グループ」と描写している)が全てそれに該当した。これらはすべて個人を主体とした契であるのに対して、「隣里契中」は自然村落単位の集団的な契であり、達里村で重要な役割をはたした⁵²。

達里は地域的に大きく4つの小さな区域に区分される。達里の人々はその小区域を「カクタン」あるいは「隣里」と呼んだ。それぞれの小区にはもともと1つずつ「隣里契中」が組織されていたが、次第にその機能を喪失し、1936年当時には中央の小区だけに「隣里契中」が存続していた。

隣里契中は契員(契の構成員)の結婚や死亡に際して扶助をして行事を助け、年に1回ほど共同作業として各カクタン内の道路を修理するなど、村落共同体の共同扶助と共同労働の組織であった。それぞれの隣里契中は独自に財産を所有したが、隣里契中がなくなった地区は財産を喪失したため、契としての機能を失ってしまった。中央に位置した小区(ポクパン・カクタン)の場合、契員が33名で、正月と秋夕(お盆)の年2回集会を開いた。新しい加入者がいれば、夏(ボルム契中)、すなわち秋夕契でこれを承認した。新しい加入者は財産の均分額に該当するお金を払わなければならなかった。契員に吉凶事が起こった場合、冠婚の場合にはお金を出し、葬礼の時には旗を作る紙、灯籠用の壺と油、あるいはロウソクと人夫1人を提供した。冬には共同で夜に苗代縄、すなわち苗代に使う縄を作り、終われば「夜食」をいっしょに食べた⁵³。

重要な定期洞会は、陰暦の正月と秋夕に開いた。正月の洞会は「洞際」の前日、すなわち陰暦の正月14日に開き、前年度の洞会計を決算し、新年度の行事や予算を決定した。その他に、洞会で区長に対して年間60ウォンを支給した。過去洞会は財産から得た収益で行事を開催したが、日帝植民地化以後に主要財産を喪失し、1936年当時には書堂(洞

50 同、285頁、前掲、강정택 [姜鋌澤]、246-249頁。

51 이영훈 「농촌사회의 신용과 계」 [農村社会の信用と契]：1853-1934]、『맛길의 농민들 [マツジルの農民達]』、일조각、2001年。

52 前掲、小川、285頁。

53 同、285-286頁。

舎のことを示す)の土地および建物、「脱穀場」の跡だけが残った。脱穀場の使用料が洞会の主要財源であり、小作で耕している洞番(村の共有田)の小作料は洞会の最大の収入源であった⁵⁴。

達里の宗族組織や通婚圏等は、村落の範囲を超える傾向を見せた。「純粋に地縁的な集団」である隣里契中は、村落の境界を越えない。村落共同体としての達里の特色を示すのは、洞の組織、特にその機関としての「洞会」である。洞会は邑面制施行以前には、実質的に達里の立法、行政機関であった。1930年代にはその機能を大きく喪失したが、社会的権威を後ろ盾にしながら、相変わらず存続していた。洞会を運営するのは数人の「知事」であった。知事は投票によるのではなく、名望によって選出された。家門の財力よりも、実質的な統率能力が第一に重視された。さらに重要なのは、町の長老と呼ばれるに相応しい高齢者であったという点である。達里村では長幼の序列、年齢階級の観念が日常生活で大変重視された。このような年齢重視の観念は、日本から来た調査者たちの目に非常に独特な姿として映った⁵⁵。

(3) 達里の共同労働組織と共同体の解体

達里の共同労働組織として最も注目されるのは、「農庁」である。農庁は洞里全体、あるいは部落全体で行う強制的な共同作業、すなわち洞トゥレ(農繁期に協力し合うための集落内組織)組織を指す。しかし、達里では1934年に農庁が分裂したため、達里調査が行われた当時には類似した慣行はあったものの、その意義はすでに変質してしまっていた。1936年当時、すでに村全体をまとめる共同労働組織としての農庁は消えていた。そこで調査団は、部分的に行われる共同労働を通して、農庁を類推するというやり方で調査を進めた。

各農家は農庁に人夫を1名ずつ提供する義務があった。農庁は2回目以後の田の草取り作業を共同で行うことを主要な目的としていた。農庁はいろいろな集団に分かれ、全世帯の水田を共同で除草していくが、その際に「達里農旗」と大きく書いた赤い「農旗」を立て、楽器を演奏した。1936年当時には農庁は分裂していたが、「日記契」の契員間で行われていた共同作業から、その痕跡をわずかに察することができる⁵⁶。脱穀場で農民たちは「達里農旗」を立てて踊り、農楽器を演奏する姿が写真でも残っているが、「日記契」の共

54 同、286頁。

55 同上。

56 小川、前掲、287-288頁。共同労働組織の運営状況を把握するため、調査団は調査当時残っていた慣行を調査し、写真と動画で撮影した。従って、「達里農旗」を立てた農庁の姿やプマシをし、農路に座って昼を食べる姿など今伝わる視覚資料は村全体単位で運営されていた1934年以前の農庁の姿と同じわけではない。

同作業を撮影したものである⁵⁷。

農庁の共同草取り作業は、本来無償で行われていた。「日記契」の共同労働は農庁の姿と似ているが、村全体が参与するものではなく、その意味では、小川が見たのは農庁というよりも、プマシ（共同で農作業をすること）だったと言えよう。毎年夏に行われていた達里村の農庁は、1934年を最後に分裂した。農庁が分裂した根本的な原因は、農民層内部の階層分解が深化したためであった。直接的な原因は共同作業にあったと言われているが、中小農では自らが直接人夫として参加するのに対して、富農たちは大部分が作男を参加させたことに起因していると思われる。このため、作業中に労働条件や食事をめぐって摩擦が生じることもあった。このように、共同労働が結局富農に有利になる一方で、経営面積がより小さい中小農には不利になったことも一因であろう。小川は民俗学者として、達里村で行われていた洞祭やナダリ（旧暦の7月頃に、田の草取りを終えてしばらく休んで遊び楽しむこと）などを調査し記録した。ところが、達里村では1934年農庁が分裂することによって、村落共同体が参加する洞祭やナダリもやはり中断した。そのため、小川は村の住民（パク・チュンソク）から関連した内容を聞き、それを文字に整理するやり方でその内容を紹介している⁵⁸。

村内部の階層分化が進行するにつれて村落共同体が分裂し、それは共同労働組織や洞会の解体として現れた。村落共同体の分化と分裂は以前から進行してはいたが、1930年代に入ると、村落全体が農庁を持続できないほど瓦解したことは特に注目される。朝鮮総督府は農村共同体の安定化と労働効率性の強化のために、農村の共同労働や、それに関連する民俗娯楽等に改めて注目していた。しかし、達里村の例からわかるように、農民層の解体が深化することで、共同労働の基盤自体がぐらついていたのである。

当時撮影された達里村の映像は、脱穀などの農業労働の姿を数多く記録している。撮影時点が麦打ちの時期であったこと、民俗調査者たちが農業労働に多大な関心を払っていたためであった。映像からもうかがえるが、達里村の農家は大部分が手動式の「ホルケ（稲扱きの慶尚道方言）」に依存したり、穀竿からざおを用いて脱穀するのが一般的であった。村の何軒かの上層農家では、動力脱穀機を導入するなど、限定的ではあったが、農業道具に質的变化が現れていた。しかし、大多数の達里農家は、商品生産よりも自家消費を目的としていることが多く、脱穀等の農業道具は伝統的方法に依存することがより一般的であった⁵⁹。

達里調査の結果として、整理された報告書や論文、写真や映像に見られる達里村の様子には、1930年代の朝鮮の農村が直面していた構造的矛盾や危機が浮き彫りになっている。

57 小川、前掲、287頁。

58 前掲、288-289頁。

59 前掲、289頁。

農民層の分裂が深化しながら、村落共同体の解体も深まっていった。騒々しい植民地近代化のかけ声にもかかわらず、達里村は村落共同体の解体が進行する中で伝統的な農業技術や道具に依存しながら、零細な生計を維持するような状況であった。達里村は農民層の下降分解とともに社会的安定性が失われる中で、共同体的な互恵性や相互扶助的な原理もまた解体していく1930年代の農村共同体の姿を表している。このような状況下で、少なからぬ住民が生の手を捨てて、日本へ、満州へ、働き口を求めて行った。こうした農村の現実をよそに、日本から渡ってきた民俗学者が記録した朝鮮農村のイメージは、牧歌的な農村の日常生活や風習、そして土俗的な蔚山邑内市場の様子だったのである。

IV. おわりに

達里に関する社会衛生的調査結果を収録した報告書は、達里農村の経済的状況を「窮乏」と要約している。こうした経済的困窮が、さまざまな特徴的あるいは低劣な社会衛生状態の背景であると指摘することから、報告書は説き起こされている⁶⁰。社会衛生学自体が健康と衛生に対する社会的責任や経済的規定性に焦点を置いていたからである。ただし、調査チームが目的としていた都市およびその他の農村との比較や、階層間の衛生状態に関する比較が持つ含意が何なのかに対する叙述は十分ではない。

民俗学的調査が伝える達里村の姿は、相対的に伝統的かつ牧歌的である。植民地朝鮮に対する民俗学的研究は、帝国によって文明化されなければならない野蛮である植民地、それに即した言説の生産という側面を持っていたからである。とはいえ、達里調査に臨んだ民俗学者は、民具の収集や映像の記録等、アチックミュージアムが追求していた物質文化の比較研究を念頭において調査を進めた。そうした民俗調査の結果を報告書として完成できなかった1930年代末の日本の状況により、達里の民俗に関するアチックミュージアムの解釈に触れることができないのは残念なことである。

朝鮮に対する民俗学的研究は植民地期当初から行われていた。その一つの目的は、植民地化による支配のための現地対策樹立用の情報収集と記録作成としての調査研究の一環であった。朝鮮総督府の末端の警察組織が、情報収集や民俗収集の組織として一般的に活用された。たとえ朝鮮民俗に関する客観的調査を追求した場合であっても、最終的な目標は植民政策の合理的かつ効率的な執行に寄与することであった。民俗学者の学術行為は、大枠として、朝鮮総督府の統治行為と同一の軌跡上に置かれるものである。露骨な御用民俗学（官房民俗学）から客観性を掲げた学術的民俗研究までも、植民統治の政治的目的に添うことを基本前提にしていた⁶¹。

60 前掲、조선농촌사회위생조사회 [朝鮮農村社会衛生調査会]、41頁。

61 前掲、남근우、107-158頁。

1936年の達里調査当時に生産された記録の中で、服飾生活を調査した宮本馨太郎が作成した調査票と撮影した写真150枚余りが「宮本記念財団」に保管されている。民博に所蔵されている蔚山の収集民具等は124点にのぼる。調査に参加した小川徹は、かつて戦後に発表した論文で128個もの標本数を提示していた。民博に所蔵されている民具等は大多数が蔚山邑内市場で購入したものであり、その他にもヒョンジ、新亭里、ピョンヨン等近辺の村で収集したり、現地に滞在しながら農村経済を調査していた姜鋌澤が収集したりしたものもある。限定的な標本ではあるものの、これらは1930年代蔚山地域の農村の生活様式を垣間見せる。写真や映像と同様に、当時の様子に関する客観的な記録者とも言えよう。しかし、それらの記録が構成している言説の体系や植民地の農村に対して創出されたイメージは、当時の日本人や朝鮮人に、そして今日のわれわれにどのような言説の効果を発揮するかについては、批判的な分析が行われる必要がある。

植民地期に行われた日本の朝鮮研究、すなわち朝鮮人の生活環境や生の様式をどのように理解していたかは、それ自体学問的関心の対象になり得る。植民地支配という帝国主義的な権力構造の下で、それはまぎれもなく帝国主義的知識の構成過程であった。日本人にとって、朝鮮は二つの意味を持っていた。広義には、朝鮮は、日本が近代国家を形成していく過程で統合の対象にしたさまざまな日本の「地方」の一つに過ぎなかった。しかし、狭義には、日本本土のどの地方とも異なり、統合と同時に差別を正当化する言説を作り出さねばならない空間であった。この点で、朝鮮に対する「純粹で客観的」研究を仮定することは、あまりに単純であり、かつ浪漫的である。朝鮮に対する研究は直接的であれ、間接的であれ、日本の朝鮮に関する言説、植民統治のための知識の生産の一環であった。それは研究者個人の意志とは別個の脈絡で存在する知識生産の脈絡である。

達里調査は、1930年代半ばの朝鮮の農村を記録している。記録の主体は、朝鮮人と日本人が混在する学生調査団と、常民の物質文化に特別な意味を付与する民俗学者であった。帝国と植民地の拮抗関係を土台としながらも、民間レベルで行われたこの調査は、帝国権力とその統治対象としての植民地という一方向性からいささか離れた独特な経験であった。調査主体と調査対象が民族という基準では分けられず、調査の目的自体が農民の生活状態を経済的条件と関連づけようとする「進歩的な」観点に立脚していた。しかし、調査直後、日本は中日戦争に続いて太平洋戦争へと没入していき、戦争以前になされた朝鮮の農村に関する記録は、切迫した総力戦の遂行という課題の前では意味を見出しにくかったであろう。この点で、1940年という時点で朝鮮農村の窮乏と解体を証言する社会衛生調査の結果を整理し発行することができたのは驚くべきことである。

達里調査は、さまざまな理由から忘れ去られる運命にあった。まず、日本の敗戦により朝鮮半島と日本の関係が断絶し、その後、独立した韓国は分断と戦争を経ながら、激しい理念的葛藤を経験した。その渦中において、平壤が故郷だった崔應錫は北朝鮮に戻り、1990年代まで高級医療官僚として活躍した。達里調査のきっかけを提供した姜鋌澤は韓

国で高級官僚を歴任し、朝鮮戦争の渦中に拉北されて生死不明になった。一方、達里村が属していた蔚山は、1962年以後、経済開発のための工業団地に指定され、さまざまな国家公団を有する巨大な産業都市へと変化した。こうした激変の中で、植民地朝鮮を代表する農村として調査対象地に選定された達里村は、蔚山の歴史における意味づけがなされることなく忘却された。

今日の韓日両国の歴史学界では、植民地期の韓日交流が作り出した多層的効果について、多様な側面から研究しなければならないとの認識が広まっている。それは民族主義的敵対の二分法とは異なったレベルにおいて、植民地期の交流が互いにとってどのような経験であったのか、そしてそれがポスト・コロニアリズムの時代に何を残していったのかを、多角的に解釈しようとするものである。達里調査はそのような問題意識に立脚して研究するのに適した、この上なく魅力的な歴史的経験である。官僚や既成の学者ではなく、大学生、それも朝鮮人と日本人の学生たちがともに参加した調査団が、帝国の公用語をほとんど理解できない朝鮮の農民たちを対象にして、対面調査を実施が実施されたからである。その調査は日本民俗学において常民研究を組織した洪沢敬三の後援で行われ、彼の影響下にあった民俗学者たちも同様に現地を訪問して民俗調査を実施した。

本論文は、以上のような調査の背景と経緯を理解するための始発点に過ぎない。達里調査の記録は、植民地の歴史を再構成するのに成熟した歴史学界の知見に基づく本格的な解釈を待っている。これを通して多角的な研究が旺盛に行われ、ポスト・コロニアリズム時代において混乱を経験している韓国と日本が、健全かつ平和な関係を築き上げるための肥やしになることを期待している。

(日本語監修 井上厚史)

参考文献

[韓国語文献]

- 강신익, 「의학의 세 차원 - 자연의학, 사회의학 그리고 인문의학」 『의철학연구』 6, 2008
- 김영희, 「일제 지배시기 한국인의 신문접촉 경향」 『한국언론학보』 46-1, 2001
- 맹광호, 「한국에서의 지역사회의학의 실천」 『한국카톨릭병원협회지』 6-1, 1975
- 박윤재, 「40-60년대 농촌위생연구소의 설립과 활동」 『역사와현실』 72, 2006. 2
- 조규상, 「교회와 사회의학」 『한국카톨릭병원협회지』 3-2, 1972
- 허영란, 「식민지 구관조사의 목적과 실태」 『사학연구』 86, 2007
- 허영란, 「근현대 울산지역 장시 변동과 지역질서의 재편」, 『역사와경계』 81, 2011
- 강정택, 『식민지 조선의 농촌사회와 농업경제』, YBM Si-sa, 2008
- 국립민속박물관, 『향수, 1936년 울산 달리』 (생활용품 도록), 2008
- 남근우, 『‘조선민속학’ 과 식민주의』, 동국대학교출판부, 2008
- 안병직·이영훈 편저, 『맛질의 농민들』, 일조각, 2001
- 울산박물관, 『75년만의 귀향, 1936년 울산 달리』 (특별기획전 도록), 2011
- 조선농촌사회위생조사사회, (임경택 역) 『조선의 농촌위생』, 국립민속박물관, 2008

『北東アジア研究』第27号(2016年3月)

최길성, 『영상이 말하는 식민지 조선』, 민속원, 2009

[日本語文献]

梅棹忠夫, 「屋根裏から民博へ(梅棹忠夫와 宮本馨太郎의 대담)」『民博誕生』(中公新書 519)、中央公論社、1978

小川徹, 「南朝鮮の一農村に於ける村落生活と民具について: 1936年 慶尙南道 蔚山邑 達里 調査 個人報告」『民族學研究』21、1957(국립민속박물관, 『향수, 1936년 울산 달리』(생활용품도록)、2008に翻訳収録翻されている)。

朝鮮農村社会衛生調査会, 『朝鮮の農村衛生』、東京: 岩波書店、1940

宮田登, 『日本の民俗学』(講談社学術文庫)、講談社、1985

福田アジオ, 『日本の民俗学』、吉川弘文館、2009

池田彌三郎・宮本常一・和歌三太郎, 『民俗学のすすめ』(日本の民俗 第11巻)、河出書房新社、1976

[インターネット・サイト]

韓国歴史情報統合システム (<http://koreanhistory.or.kr>)

日本デジタル辞書統合サイト (<http://kotobank.jp>)

キーワード 達里調査、アチックミュージアム、洪沢敬三、社会衛生調査、民俗調査

(HUR Young-ran)